

論 文

初年次教育として必修英語科目の果たしうる機能
コミュニケーション能力育成を視野に入れて

福 本 陽 介

名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部

日本福祉大学 非常勤講師

On the Function of the Obligatory English Classes for the Freshman Education:
With Special Reference to the Development of Communicative Faculty

Yosuke FUKUMOTO

Faculty of Environment and Information Management, Nagoya Sangyo University

Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University

Keywords : 必修英語, 初年次教育, 英語教育, コミュニケーション能力, 友人作り

Abstract

This paper proposes that an obligatory English class can be an effective scene to help freshmen not only enjoy learning English but also learn how to spend a meaningful campus life, make friends with their classmates, and develop the communicative faculty through various activities given in class. One of the important things for freshmen is to acclimate themselves to the campus life, in other words, to feel that they belong at the university. For that, it seems that making friends with others through various classroom activities is easy since a person will generally feel comfortable and even needed when he/she communicates with someone. This paper shows the development of the communicative faculty of the students in the author's classes at Nagoya Sangyo University and Nihon Fukushi University in the spring semester, 2012. Based on the questionnaires given before and after the semester, I suggest that an obligatory English class can function as a helpful means for encouraging freshmen to communicate with one another actively and to learn English actively as well.

Keywords : obligatory English class, freshman education, teaching of English, communicative faculty, making friends with classmates

要約

昨今、「コミュニケーション能力育成」が声高に謳われている。新入生が1年間同じクラスメートとともに学ぶ場である必修英語は、学生が新しい人間関係を築き、大学での居場所作りをする機会となりうる。クラスメートとともに活動する機会が増えれば、人とコミュニケーションをとることへの興味関心や積極性を伸ばし、言語を問わず、コミュニケーション能力の育成を図ることができるのではないだろうか。本稿は筆者が2012年度に担当した名古屋産業大学と日本福祉大学での必修英語クラスでの試みの記録である。授業中に実施したアンケート調査に基づいて、コミュニケーション、英語学習についての受講生の意識がどのように変化したか考察し、必修英語科目を英語の授業としてだけでなく、初年次教育の場としても利用できる可能性があるかと主張する。

1. はじめに

大学での英語教育にかんする研究は多数あるが、必修英語科目を初年次教育の場として利用しようと主張する論文は筆者の知る限り見当たらない。英語の授業である以上英語教育について論じられるのはもっともだが、コミュニケーション能力育成が叫ばれる現代において、英語の授業をその育成に充てることを考えてもよいのではなかろうか。

必修英語は新入生が同じクラスメートと1年間ともに学ぶ場である。授業中の様々な活動を利用すれば友人作りの一助となるだろうし、それは彼らの大学での居場所作りにもつながりうる。一旦人間関係ができれば、授業中に与える様々な課題を通じてコミュニケーションを相互にとる機会は増える。一方通行な講義を行う代わりに学生に実践的な活動をさせることで、コミュニケーションをとることへの抵抗をいくらかでも軽減し、人とかかわることの楽しさや必要性を実感させることができれば、それはやがてキャリア教育にもよい効果を生むのではないだろうか。

そこで筆者は2012年度春学期（前期）に名古屋産業大学と日本福祉大学の必修英語3クラスにおいて、学生が様々な課題に取り組む、コミュニケーション主体の講義形式をとってみた。本稿では、講義開始時と終了時に行ったアンケート調査や講義中の活動記録を考察し、半期間の講義を経て学生のコミュニケーションをとることに対する意識、英語を学ぶ必要性、英語を学びたいとい

う意欲にどのような変化が見られたかを報告する。そして、1年生対象の必修英語科目は、英語教育のみにとどまらず、大学に入学したての1年生の人間関係作りにも一定の効果があること、その意味で大学生としての生活を始めるための初年次教育として利用価値があること、さらには社会人として必要とされるコミュニケーション能力育成の場としての機能も果たしうると主張する。

2. 文部科学省学習指導要領解説と先行研究

大学での英語教育にかんする論考はしばしば文部科学省学習指導要領解説（以下、指導要領）に言及している。大学教育用の指導要領は存在しないが、高等学校までのそれを参照して大学での英語教育について議論している研究は多い。本節では、指導要領と教育系先行研究を概観し、大学での語学教育にかんする一般的傾向と問題点を指摘する。

2.1 コミュニケーション能力とは何か

外国語教育において頻繁に聞かれる言葉は「コミュニケーション（能力）」である。2.1節ではこの言葉を手がかりに、指導要領や先行研究での主張を概観する。

2.1.1 文部科学省学習指導要領解説

まず、指導要領における「コミュニケーション（能力）」という言葉の出現数を見てみよう¹⁾。各指導要領の総論部分のみ、教科名の一部としての出現数も含めた延べ語数は、「コミュニケーション」は高校英語で72、中学英語で11に対し、高校国語、中学国語ともに0である。一方「コミュニケーション能力」は、高校英語で16、中学英語で5、高校国語、中学国語ともに0である。「コミュニケーション（能力）」という言葉は外国語教育の場面でしか用いられていないことは明白である。

では、国語教育においてコミュニケーション教育は軽視されているのだろうか。高校国語の指導要領の「2 国語科改訂の趣旨」では「国語科の改善の基本方針」として以下のような項目を重視している（pp. 2-3より筆者抜粋。以下同様。）。

- (1) a. 実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること
- b. 言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝えあう能力を育成すること

- c. 我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむこと
 - d. 現行の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」からなる領域構成は維持しつつ、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けること
 - e. 敬語の指導については、人間関係を円滑にし、日常の言語生活を豊かにするため、相手や場に応じた言葉遣いが適切にできるようにすること
- こういった表現を見ると、国語教育においてもコミュニケーション能力を育成しようという意図は十分伺えるのだが、なぜか「コミュニケーション（能力）」という表現は見つからない。参考までに高校英語の指導要領の「2 改訂の趣旨」(p. 3)から類似した点を探すと、高校国語と基本的には大差がないことが分かる。
- (2) a. 「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、(中略) 4技能を総合的に育成する指導を充実する。
 - b. 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する。
 - c. 聞いたことや読んだことを踏まえた上で、コミュニケーションの中で自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようにすることを旨とする。

(1)(2)を照らし合わせると、英語教育も国語教育も基本的には類似した教育方針を掲げていると言ってよいだろう。しかし指導要領における用語の用い方の差は、外国語学習に対するコンプレックスの現れか、あるいは日本はコンテクスト依存度の高い文化であるため、言語運用能力の開発に対して、海外ほど、或る意味“脅迫的な”意識を持つ機会がなかったことの現れかと推測せずにはいられない。

英語教育に限らず外国語学習一般に「コミュニケーション」という言葉が目につくが、ほかにもキャリア教育(就職活動、社員教育)などの分野でも用いられることが多いようである。しかし、前者での「コミュニケーション」は英語科指導要領が謳っているように、いわゆる4

技能を言語能力として身に付けること(しかも外国人と交流するため)を指しているのに対し、後者では就職活動、社内での人間関係、社員研修、顧客との関係など、単なる言語運用能力だけではない、広義の意思疎通を射程に入れているように思われる。

現在、独立行政法人日本学生支援機構のショートステイ、ショートビジット(SSSV)など、学生の海外進出を支援する制度が実施、採択されている⁴⁾。裏返せば、これは海外志向の学生が国の期待ほど多くないことの示唆かもしれない。これについては3節で再度触れることとしよう。

指導要領を見る限り、いわゆる言語の4技能の育成について英語・国語両方が意識的であることは見てとれるが、実際の教育現場ではその4技能を技術的に向上させることが目標と意識されているのではなかろうか。「コミュニケーション(能力)」という言葉の意義についてはのちに改めて再考する。

2.1.2 大学での英語教育にかんする先行研究

英語科指導要領に言及した英語教育系論文の傾向を見てみると、授業方法と学生・生徒の英語力向上について論じた授業論(青木(2006, 2007)、川島ほか(2007))、教育理論を利用したカリキュラム研究(岡崎(1997))など、コミュニケーション能力を英語に特化した論考が多い。

前節で「コミュニケーション能力」は外国語教育のみ限定されるものではないと指摘したが、同じことを(言外に)示唆する指摘が英語教育系論文でも散見される。

岡崎(1997)は「想像力や論理的応用力も含んだ認知活動としての言語学習に重点を置くというところに大学教育の中での英語教育の意義が見出せる。」(p. 148)と指摘している。これは奇しくも(1b)のような国語教育においても重視されるべき事柄であるまいか。

川島ほか(2007)は中学校での英語の指導方針を提案した論文だが、八島(2004)の「対話力」という用語を引用し、それを「相手の気持ちや考えを正しく理解した上で、自分の気持ちや考えを伝え、相手と協力して会話を継続し発展させていく力」(p. 170)と定義し、それを身につけた生徒の理想像として(3)を掲げている(同頁)。

- (3) a. 相手の気持ちや考えを受けて、自分から質問することができる。

- b. 相手の気持ちや考えを受けて、自分の意見や考えを述べるができる。
- c. 互いに気持ちや考えを伝えあうことにより、共通の認識を得ることができる。
- d. 対話をすることの意義を感じ、継続し発展させることができる。

これも国語教育においても重視されるべきコミュニケーション能力である。

英語教育系論文の中には専門性の高い講義を調査対象としているものもある。たとえば、仲（2011）は英語科教育法という講義における授業運営の成果報告を行っている。これは科目の性質上、将来英語に携わる意志を持つ学生を対象としているため、受講生の英語学習への動機付けは教養教育としての必修英語科目受講生一般のそれよりも高いと予想される。専門教育における授業実践として興味深いのが、一般的な言語教育に敷衍するのは難しいと思われる。

一方、岡崎（1997）は神奈川大学経営学部の英語カリキュラムをとりあげて必修英語の授業方針にかんする考察を行い、プレースメント・テストでクラス分けされたクラスごとに達成目標を変えるべきだと主張している（pp. 152-153）。必修英語クラスの運営のあり方を論じるのが本稿の目的であるという点で岡崎（1997）は参考になるが、シラバスどおりの講義ができるかどうか、理想どおりの教育効果が出るかどうかは、大学ごとのカリキュラムの意図や、クラスの受講生の属性により左右される。

英語教育に特化した先行研究では「コミュニケーション（能力）」は英語教育のためのキーワードとして引用されているが、この用語は母国語も含む言語（・非言語）教育、ひいては語学に限らないコミュニケーション教育に共通したキーワードであるはずである。母国語を一切用いずに外国語教育をすることが全ての教育機関で可能とは言えないことを考えると、外国語教育研究者もその前提として国語教育がどうあるべきか議論する必要がある。大学での授業方針の効果は受講生の学習意欲のみならず、国語能力および母国語でのコミュニケーション能力にも依存しているはずだからである。また、どのような受講生を対象として調査・研究された論文であるかという点でも教育系論文はケーススタディになりやすい傾向があると懸念される。一般論を唱えることは困難だが、必修であるが故に、一般論を比較的論じやすい必修英語

が初年次科目として設定されている意味を考え直してみる必要はあるだろう。先行研究では、「なぜ必修英語科目が1年生受講科目に設定されているのか」という視点から議論されてはいないようである。教養教育科目として必修英語が1年次に配置されていることは周知の事実であり、その意味で誰もこの科目配置の意義に疑問を感じないのかもしれない。しかし、のちに主張するように、よいか悪いか別に、キャリア教育、就職力、就業力といった実学的成果が求められている現在の大学教育にとって、上記の視点から科目の意義を見当する価値はあると思う。先行研究ではこのような観点からの考察が十分なされてはいないのではないだろうか。

2.1.3 初年次教育にかんする先行研究

CiNiiで「初年時教育」という言葉をキーワードに論文を検索すると、見つかった論文は4件程度であったⁱⁱⁱ。たとえば、木村（2007）は下関短期大学栄養健康学科の新入生を専門教育に関わらせる取組みを報告している。

また、柳父ほか（2008）は畿央大学教育学部新入生を対象とした、宿泊研修前のアイス・ブレイキングとしての学生活動（班新聞作り）の取組みを報告している。宿泊研修では顔も知らない学生どうしがいきなり共同生活をしなければならない。彼らの取組みは、研修参加前にアイス・ブレイキングを行うことによって学生の人間関係形成にかかわる不安が軽減させられるのではないかという意図で導入したプログラムである。班新聞作りの学生アンケートでは、この取組みが大学に慣れるために（クラスメートと顔見知りになるために）役立ったかという設問に対して、95.3%が肯定的回答をしている（p. 195）。

これらの論文は、特定のコースへの進級に向けた初年次教育の試論や入学時の人間関係作りなどを主眼としたものである。

2.1.4 まとめ

2.1節では指導要領、英語教育系先行研究、その他の初年次教育にかんする先行研究を概観してきた。指導要領と英語教育系先行研究では「コミュニケーション（能力）」は外国人との意思疎通の手段として英語の4技能を向上させるためにどのような授業を展開すべきかが大きな目標として掲げられている。したがって教授法の研究が当然多くなる。

一方、初年次教育にかんする論文では、新入生をいかにして大学生生活に馴染ませるか、いかにして教養教育と専門教育を連携させるかといった試論が紹介されていた。これらの論文は「コミュニケーション（能力）」という言葉振り回しているわけではないが、言語運用能力とは違った切り口からコミュニケーションについて議論していることは間違いないだろう。

2.2節では本稿の提案と「コミュニケーション（能力）」の定義を明らかにし、3節での本論の布石とする。

2.2 本稿の提案とコミュニケーション能力の定義

2.2.1 提案

本稿は必修英語を初年次教育といかに結びつけるか、実際の講義方法と受講生調査に基づいて議論を進める。具体的には(4)が達成目標であると言ってよい。

- (4) a. クラスメートと友人関係を築く。
b. そのため意思疎通を図る機会を多く設ける。
c. 英語で意思疎通することへの抵抗を軽減する。

この目標を達成し、英語教育の場を初年次教育の場としても有効活用できる講義方法の一例として、ペアワーク、学生に提示する課題や提示する順序など、既存の手段を用いた授業改革案を提案する。筆者の調査・考察では、1年生の前期半期間の講義で実践した講義において、(4)の目標は概ね達成されたと思われる。

2.2.2 コミュニケーション能力の定義

コミュニケーション論という学問自体、様々な分野から議論可能な領域であり、学者によって「コミュニケーション（能力）」の定義も様々である。

宮原（2006）は「コミュニケーション・コンピテンス」ということばをキーワードとし、コミュニケーション能力について(5)のように述べている（p. 19）。

- (5) 「コミュニケーション能力」というと、「大きな声で、はっきりと、相手の目を見ながら、身振り手振りを使って、言いたいことを伝える」といった、末端の、表面的な、技術的なパフォーマンスの側面を指すように思われる。確かに、コミュニケーションの最終的な、目に見える部分も大切なのだが、そこにいたるまでのプロセスに含まれる能力、力量、度量、適正、資質、そして日常の「生き方」までをも含んだことばがコンピテンスである。

外国語教育の場でこの用語が頻繁に引用されているの

を見ると、宮原のいう「末端」部分の教育を重視している印象を受けるのだが、コミュニケーションは単なるシンボルとしての言語の運用技能のみで成立しうるものではなく、個人の生まれ持った、あるいは生後開発された性質のほか、言語学的に言うならば、語用論的な処理能力、推論能力などもかかわる。

現在はコミュニケーションをとる手段が多様化しているが、究極的にはコミュニケーションは誰かと顔を合わせて行わざるを得ないもののはずである。したがって、本稿では、「人と接する勇気を持ち、積極的に人と意思疎通を図り、自分の意見も言え、他人の意見にも耳を傾けられる能力」をコミュニケーション能力の定義としておく。この定義は目新しいものではないが、英語と国語の指導要領における“見えざる”共通目標を束ね、特定の言語に依らないコミュニケーション教育を行う教育理念として機能しうると考えられる。

3. 受講生の属性調査

本節では、2012年度春学期（前期）に筆者が担当した、名古屋産業大学環境情報ビジネス学部の必修英語科目「イングリッシュ・コミュニケーション」（春学期開講、以下 EC-I）2クラスと、日本福祉大学社会福祉学部の必修英語科目「フレッシュマン・イングリッシュ 1-1」（前期開講、以下 FE-1-1）1クラスで実施した講義と、学生への事前調査および事後調査、講義中に適宜書かせた活動記録に基づいて考察する。

これらの講義はともに1年生が受講する科目である。EC-Iは英語の基礎学力の養成を目的とし、FE-1-1は主に英文読解・異文化理解などを学習させることを目的としている^{iv}。

クラスの特徴としては、名古屋産業大学の2クラスは日本人以外に外国人留学生も含まれているのに対し^v、日本福祉大学の1クラスは日本人学生のみである。人数はいずれも25-27名である。

筆者は毎年学期はじめに「受講前アンケート」を行ってから講義を始めている^{vi}。このアンケートの質問項目は以下のとおりである。

- (6) a. 英語は好きか嫌いか
b. 英語は得意か苦手か
c. 文法事項を理解していると思うか
d. 授業に臨む意識
e. どの程度の英語力を身につけたいか

- f. 就職先は国内希望か海外希望か
- g. 読書をする習慣はあるか

この集計結果を学生に示し、自分の所属するクラスがどのような意識を持った集団であるかを学生に認識させ、クラスの属性に合わせて指導方針や達成目標を提示している。受講生の希望を全て叶えることは不可能だが、学生は授業方針に或る程度納得して講義に臨んでいたと思われる。

以下、各クラスの入学時点での受講生の意識を示すが、クラスの特定を避けるため、この3クラスを、Class 1, Class 2, Class 3 と表記して議論を進めることとする。このアンケートの有効回答数は全クラス 100%である。

3.1. 受講前アンケート調査結果

3.1.1 科目としての好みと得手不得手

英語が好きか嫌いかという質問の選択肢は、「一番好きな科目」「大好き」「結構(かなり)好き」「わりと(まあまあ)好き」「好き」「好きでも嫌いでもない」「わりと(どちらかというと)嫌い」「嫌い」「結構(かなり)嫌い」「大嫌い」「一番嫌いな科目」と、学生の微妙な心情を把握するため細分化したが、大まかな傾向をつかむため、表1のように単純化して示す。

表1 英語は好きか嫌いか

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
好き	48.1%	36.0%	40.0%	41.6%
嫌い	40.7%	32.0%	28.0%	33.8%
どちらでもない	11.1%	32.0%	32.0%	24.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

得意か苦手かという質問も、「一番得意な科目」「とても得意」「結構(かなり)得意」「わりと得意」「得意」「得意でも苦手でもない」「わりと(どちらかというと)苦手」「苦手」「結構(かなり)苦手」「とても苦手」「一番苦手な科目」と選択肢を細分化したが、表2のように単純化して示す。

表2 英語は得意か苦手か

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
得意	3.7%	8.0%	12.0%	7.8%
苦手	70.4%	76.0%	52.0%	66.2%
どちらでもない	25.9%	16.0%	36.0%	26.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表1と表2を比較すると、好きかどうかと得意かどうかは比例していないことが分かる。好きではあるが、自信を持って得意だとは言えない傾向が顕著に見てとれる。

表1の調査で否定的回答をした学生に対して英語が嫌いになった理由を記述させてみると、文法の授業についていけなかったことが原因だという意見が多い。しかも、中学時代に英語に苦手意識を持ったという回答が多い。他に少数だが散見されるのは、担当教員との相性が悪かったことが原因であったという意見である。

3.1.2 授業に臨む意識と理想とする習熟度

表3はどのような意識で授業に臨むか、表4はどの程度の英語力を身に付けたいかを問うた結果である。それぞれ複数回答可とした。

表3の質問では「単位さえ取ればよい」「英語で読書がしたい」「英会話がしたい」「映画を日本語字幕なしで見たい」「資格を取得したい」という選択肢を設けた。

表3 授業に臨む意識

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
単位のみで可	17.0%	27.1%	24.1%	22.8%
英語で読書	23.4%	25.0%	18.5%	22.1%
英会話	38.3%	29.2%	31.5%	32.9%
映画(字幕なし)	10.6%	10.4%	13.0%	11.4%
資格取得	10.6%	8.3%	13.0%	10.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

この結果から、英語が嫌い(苦手)な学生の本音として単位さえ取ればよいという回答も2割強あるものの、学生の学習意欲は十分あると言ってよいだろう。特に英会話ができるようになりたいという希望が多い。

さらに、英語を習得しようという意識がどの程度か探るため、海外旅行で使える程度か、小説など軽い読み物を読める程度か、専門書レベルの難解な書物を読める程度か、職業で使いたいかを調べてみた。

表4 どの程度の英語力を身に付けたいか

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
海外旅行	44.4%	50.0%	48.1%	47.4%
小説	48.1%	33.3%	33.3%	38.5%
専門書	0.0%	4.2%	0.0%	1.3%
職業	7.4%	12.5%	18.5%	12.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表3では英会話を身に付けたいという回答がもっとも多かった。海外旅行で英語を話したいということがその理由だ。また、難解な書物ではなく、英語を娯楽として楽しむ程度に軽い読み物を読めるようになりたいという回答も多い。将来仕事で英語を使いたいという希望を持つ学生が少数いることも、受講生の学習意欲を刺激するよい材料になりうる。英会話は海外旅行だけでなく仕事でも役に立つことは明らかだからである。

仕事で英語を使いたいと回答する学生もいるだろうと想定し、就職先（勤務地）として日本国内と海外のどちらを希望するかもあわせて調査してみた。その結果が表5である。

表5 希望する就職先

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
日本	96.2%	87.0%	76.0%	86.5%
海外	3.8%	13.0%	24.0%	13.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

この結果を見ると、海外旅行で英会話をしたい、授業でも英会話を学びたいという意欲を持つ学生の割合が高いわりに、国内志向がどのクラスでも強いことがよくわかる。2.1.1節で触れたように、グローバル人材が求められていると世間では言われているが、大学入学時点での学生の意識は必ずしも国の期待とは比例してはいないようである。

表3-5を単純に照らし合わせてみると、英語を学びたい意欲は主に娯楽として、あるいは教養程度に英語力を身に付けておきたいという意識に裏付けられているように解釈することも可能だろう。

では、大学卒業後日本国内で就職を希望している彼らは母国語に関心を寄せているのだろうか。そこで最後に普段から読書をする習慣があるかどうかを問うてみた^{vii}。

表6 読書はするか

	Class 1	Class 2	Class 3	1-3 平均
する	61.5%	66.7%	40.0%	56.0%
しない	38.5%	33.3%	60.0%	44.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

平均をとると読書の習慣の有無はほぼ同程度と言えるが、クラスによって差が見られる。読書量は母国語を書く力を育てることに効果があるはずである。留学生の書く日本語はハンデをつけて見るべきであるが、大学生

として期待したくなる程度の表現ができる日本人学生がどのくらいいるかは、講義中に書かせる感想文などを読めば或る程度は把握できる。この質問ではマンガは除くこととしたが、学生と個人的に話をしているとライト・ノベル（彼らは「ラノベ」と言う）を読んでいる者が少なからずいるようである。純文学などを読む学生がどの程度いるか調べてみる価値はありそうだが、読み物の種類はともかく、活字に触れる機会を持っているかどうかを確認することがこの質問の意図であった。

3.1.3 まとめ

3節では3クラスの学生の入学時点での属性を観察した。先に述べたように、「受講前アンケート」は筆者が1年間担当する学生、クラスの特徴をつかみ、できるだけ彼らに適した授業をするために実施している。しかし、これを担当教員だけの資料として用いるだけでなく、集計結果のみ受講生に示すことで、自分たちのクラスの受講意識を自覚する機会を与えることができる。

次節では、このアンケート調査に基づいて筆者の行った授業と学生の活動について述べる。

4. 授業方針と学生の活動

4.1 シラバスはどこまで有効か

上述のとおり、筆者は講義開始時に学生の英語学習に対する意識調査を行い、それを参考にして授業方針を定めて授業を行っている。このやり方については反論が出るかもしれない。学生の顔色を見ながら講義をしてよいのかと。

現在、大学入試の形態は非常に多様化している。一般入試、推薦入試（指定校推薦・姉妹校推薦・スポーツ推薦など）、AO入試などがあり、大学が必ずしも学力だけで学生を選抜しているとは言えない。大学受験を経験した時代を問わず、一般入試で受験戦争を体験した人であれば、いわゆる受験英語の勉強もしているだろうから、高校卒業程度の英語の基礎学力が或る程度備わっているという前提で大学での英語教育を行うことになる。

しかし、高等学校の学科も筆者が高校生であった時代以上に多様化している。或る工業高校教諭から、工業高校の生徒は卒業後就職する学生が多いという話を伺った。大学進学者も増加させたいという話もお聞きしたが、大学の学部・学科と高等学校のそれとが一致していれば、多様な入試を利用して、普通科のようにカリキュラム上

一般入試の受験対策を受けていない学生が大学に入学する機会も増える可能性がある。

名古屋産業大学の場合、普通科高校出身者のほか、工業、商業、窯業、環境、食物栄養などの学科からの進学者も少なくない。日本福祉大学社会福祉学部の場合なら、普通科出身の学生のほか、高校でも福祉を専攻していた学生もいることだろう。そうすると、高校で必修科目、または選択科目として受講しなければならない英語の科目数に隔たりが出ることは十分考えられる。名古屋産業大学には留学生も一定数いることから、日本語学校で日本語を学んでいるうちに、本国で習った英語を忘れてしまった学生もいる。これは本稿で調査した2校に限った話ではないが、こういった現状を見ると、入学時点での学生の基礎学力が一定であると仮定して講義することは難しい。

その対策としてプレイズメント・テストを実施し、同程度の学力の学生を一クラスにまとめる取組みが多くの大学でなされている。これによって多様な学生の属性を(或る程度)均一化することはできるかもしれないが、それですべて問題が解決されるわけではない。

プレイズメント・テストを実施するのは入学が確定し、新学期が始まる直前、または入学式辺りであろう。しかし、次年度のシラバスは前年度の1月から3月までの間には作成される。しかも講義で使用するテキストを指定し、15回分の授業案を明記しなければならない。どのようなクラスを自分が担当するのか、事前に簡単な情報は得られるものの、受講生の構成により、学力が常に担当教員の予想どおりであるとは限らない。テキストを事前に決定しておくことの弱点はここにある。

これは教務管理上やむをえないことであろう。本稿でこの問題について深く立ち入るつもりはない。しかし、筆者自身の体験のみならず、多くの英語教員からも、指定したテキストがその年度に担当した学生に合っていなかった、テキスト一冊を予定どおり使いこなす(使い終える)ことができなかったという話を聞く機会はある。

かつて筆者が高等学校で教育実習を行った時、口数の少ない教科指導担当教諭から、「教案どおりに進まないと分かったら教案を捨てる勇気を持つことも必要だ」とご指摘を受けたことがある。これは大学教育にも言えることである。シラバスに書いたとおりに講義をすることが大切なのか、それともシラバスを破棄しても、受講生に合った講義に適宜変更していくことが大切なのか、こ

れは議論を待たない。

筆者もこれまで様々な市販のテキストを使用してきたが、ここ2年ほど、テキストを使用しない授業を試みてきた。実際に受講生の顔を見てみないことには学生に向学心を起こさせる講義を展開するのは難しいのではないかと思うからである。

4.2 授業方針：「英会話」という授業の難点

以上のような理由から、筆者は2.2.1節の(4)に示した達成目標を掲げた上で、学生が納得して取り組める授業作りができないか試みている。そのような授業方針をできる限り組織的に構築しようとしたのが本年度春学期(前期)の取組みである^{viii}。

さて、今年度の3クラスに対しては、3節で示した受講前アンケートの結果に基づき、英会話を実践的に学習する講義を行うこととした。Class 1-3のいずれでも、学生の多くが英会話学習を希望しているということ、彼らのその意志を尊重することで英語学習が楽しいと実感してもらうこと、それにより中学・高校時代の英語学習に対するトラウマをいくらかでも払拭することがねらいである。

教材は毎回筆者が様々な参考書を利用しながら作成した。次節で学生の活動について詳細を述べるが、自己紹介、道案内、地下鉄の乗り換え案内が春学期(前期)に取り上げたテーマである^{ix}。はじめはその教材で会話の一般的な流れを教授し、その後学生どうして英語でコミュニケーションをとらせ、課題に取り組みさせる。

言うまでもないが、英会話に一般的な流れや法則などはない。これは英語に限ったことでもない。会話はその会話への関与者どうしの関係や話題、気分、場面など様々な要因の影響を受ける。英会話教材ははいて捨てんばかりに出版されているが、それらはあくまでも一つのモデルとして提示された会話の事例集であると考えべきである。状況によって教材どおりに会話が進むとは限らないということを学生に周知しておくことは無意味ではない。

「英会話」は実際に英語を喋ったという実感が直截的に得られる利点があるが、教材に書かれた表現以外は何も言えない、したがって想定外の方向に話題が転じると何も話せなくなってしまうという欠点もある。英会話教材の多くには、関連表現や簡単な文法・構文情報も掲載されていることが多いが、これらは或るテーマで会話を

する場合に利用できる手段として、丸暗記して終わってしまう可能性がある。結局英語は暗記ものだということになってしまうと、覚えることだけで学生が学習意欲を失ってしまう可能性も完全にはぬぐい去れない。自分の意見をはっきり述べるためには、丸暗記だけではなく、文法を学ぶことも大切なだと学生に気付いてもらえることが望ましいが、そこに至るまでには学生自身の試行錯誤が必要だろう。

語用論、ないしはコミュニケーション論的観点から述べると、会話は英会話教材に記されているような、英語という言語（シンボル）を運用するだけで成り立つものではない。ジェスチャーなどの非言語媒体もコミュニケーションをとる上で有効な道具である。それら、利用可能なあらゆる手段を利用してコミュニケーションをとるよう、学生には指示を出した。完璧な英語表現を暗記することではなく、たとえ予想外の方向に会話が転じたとしても、機転を利かせて対応できる能力の方が実社会では役立つことも多いだろう。英語の授業である以上英語でコミュニケーションをとることを学生に要求はするが、英語だけで対応できなくなったら、その他の手段を用いてもコミュニケーションを成立させさえすればよいと常に学生を鼓舞した。

次節では具体的に学生がどのような活動を行ったのかを紹介していくことにする。

4.3 学生の活動

4.3.1 自己紹介

自己紹介は多くの教材で最初に提示されているテーマの定番である。クラスメートと触れ合う機会を作るといふ目的では、これは有効なテーマであろう。そこで、以下の資料1を配布し、学生どうして自由に会話をさせることにした。今後様々な活動を学生どうして行わせるためには、面識を持つ機会を与えることは大切である。

【資料1】

出身地を語る (友達を増やそう)

<挨拶>

A: Nice to meet you.

B: Nice to meet you.

<出身地についての会話>

A: Where are you from?

B: I'm from _____. Have you ever been there?

A: Yes, I have. / No, I haven't.

B: Do you know anything about _____?

A: Yes, I do. / No, I don't.

A: What is famous in your hometown?

B: _____ is famous.

Have you ever heard about it? (Do you know about it?)

A: Yes, I have. / No, I haven't. (Yes, I do. / No, I don't.)

Words

prefecture 県 (e.g. Ehime Prefecture, Aichi Prefecture)

lie (v) ~にある (e.g. My town lies to the north of the city.)

<好きな歌手や芸能人などについての会話>

A: I love [I'm a big fan of] _____.

Do you know of him / her / them?

B: Yes. / No.

A: Have you ever heard his/her/their songs?

B: Yes. / No. What is your favorite song?

A: I like [love] _____.

B: I know that song. / I don't know that song.

この資料を用いて、最低5名のクラスメートと会話をしよう指示した。どのクラスでも、最初は近隣の席の学生どうして椅子に座ったまま会話を行っていた。入学したてで面識もない人と話さなければならぬため、当然緊張もしていたことだろう。しかし、それもその後劇的に変化していくことになる。4月に実施したこの自己紹介活動はあくまでもアイス・ブレイキングとして行ったものであって、自己紹介表現を学習させることを主目的としてはいない点に注意されたい。

4.3.2 道案内

上記のアイス・ブレイキングを経て、本格的にコミュニケーション活動を開始した。できる限り実際にありそうな場面設定をとりあげて学生に活動させるため、まずは道案内から始めることにした。資料2のほか、地図も利用した。道案内は母国語ですることすら容易とは言えないが、学生が「英会話」だけに頼らずコミュニケーションをとることができるかを見ることとした。今回使用した地図は仙台市青葉区、国分町・一番町である。

【資料2】

道を尋ねる

A: Excuse me. Could [Would] you tell [show] me the way to _____?

B: Sure. [Certainly.]

Walk _____ block(s) (from here).

(Go straight for _____ block(s).)

And Turn left [right] (at the traffic light).

You can see _____ on your left [right].

または

It's just around the corner.

または

I'm going in the same direction. Could you come along with me? I'll show where it is.

A: How long does it take?

B: It takes about _____ minutes [on foot / by bus / by train].

A: Thank you very much. [It's very kind of you.]

B: You're welcome. [Not at all./ Don't mention it.]

【参考までに】

- ・郵便局: post office
- ・信号: traffic light / signal
- ・交差点: crossing / intersection ex. walk across the crossing
- ・police box / koban
- ・ガソリンスタンド: gas station
- ・電気屋: electrical appliance store
- ・病院: hospital
- ・大学: university / college
- ・コンビニ: convenience store
- ・喫茶店: tearoom / coffee shop / café
- ・ゲーセン: game arcade
- ・銀行: bank
- ・ATM: automatic teller machine
- ・消防署: fire department (米)/ fire station (英)
- ・屋上: roof / roof top
- ・斜めの: diagonal
- ・突き当たり: end ex. at the end of this street

学生は地図上の或る一点(仙台市役所)を出発点とし、道を聞く役、教える役を担当し、数人の学生とコミュニケーションをとる。道を聞く場合、どこに行きたいかは本人が自由に決めることとし、それを英語で尋ねさせる。道案内をする側は相当の試行錯誤をしつつ英語で道案内をすることになる。

この練習を2週間程度行ったあと、実技試験を行った。筆者が無作為に2名の学生を指名し、その2名は教室で他の学生たちが見守る中、道案内を行う。その際学生は資料2を見てはならない。どの程度英語で会話ができるか、英語だけで十分なコミュニケーションがとれない場合、どのような手段を用いて対処しているかが主に評価すべき点である。このようなやり方は、人前に立つことを得意としない学生にとっては非常にハードルが高い可能性がある。しかし、社会人になれば、得手不得手はともかく、他人とコミュニケーションをとらずに仕事はできない。時折学生にこのような話をし、各自にできる精一杯の努力さえすればよいと激励した。

今回使用した地図は或る程度区画がわかりやすい街のものであったが、上手く説明したくても説明できず苦労している学生の姿がしばしば見られた。筆者は教室を巡回しながら困っている学生にアドバイスを与えるようにした。

道案内の仕方は様々である。現在位置から目的地まで

完璧に説明する必要はあるだろうか。道を聞かれた人が必ずしも道を知っているとは限らないし、母国語でさえも上手く説明できるとは限らない。我々が他人に道を尋ねた時、相手の説明が100%理解できることもあれば、全く理解できないこともあるだろう。こう考えると、道を尋ねた人が目的地に近づける手助けができればそれで十分であり、必ずしも完璧な説明ができなくてもよいのだと、学生の不安を取り除いてやることはできる。たとえば、どこか目印になる場所を見つけ、そこまでの案内をし、そこから右折、左折させ、その後直進させる。言われたとおりにその人が歩いていけば、本人は当然左右を見渡ししながら道を進むはずであるし、分からなければまた別な誰かに道を尋ねるだろう。つまり、道を聞かれた人が全責任を負う必要はないのである。

また、言葉では表現しにくい道のりもある。外国語で説明することも当然難しくなる。そういう時こそジェスチャーなど非言語コミュニケーションを利用すべきである。授業中の活動や実技試験では、道案内役が指を指して"Over there! Over there!"などと叫ぶ姿も見られたが、それで或る人物の進む方向を示せたのであれば、道案内の目的は概ね達成できたと言ってよい。

実技試験実施時は必ず感想文を書かせた。質問項目は以下のとおりである。

- (7) a. 今日の英会話実技で、自分はどのような努力をしましたか。また、どのような点で頑張ったと思いますか。自己評価して下さい。
- b. 今日の自分に足りなかったところ、反省すべき点がありますか。客観的に自分を見直してみして下さい。
- c. 今日の自分の出来を100点満点で評価するとしたら何点ですか。
- d. 他の人から学んだ点、発見した点などがあれば、記して下さい。

この感想文の意図は、学生自身に自分を客観的に見つめ直す機会と、他人から学ぶ機会を与えることにある。学生の記述を見ると、クラスメートの実技から様々なことを学びとっていることが分かる。

- 「指を指して方角を教えている人がいたので、あの方角へ歩いていけばいいのかと分かるので、方向音痴な私にとってはいいなと思った。」
- 「道を聞く側の人でも“聞いているよー”っていうアクションがあった方が伝わっているのが分かっていいのかな

としました。」

- 「笑顔はやっぱり好感がもてるなあと思いました。英語がペラペラでもむっとした顔だと申し訳なくなるし…」

このように、英会話の実技といえども、どのように他者とコミュニケーションをとるのが望ましいか、あるいは効果的か、学生はよく観察している。

自分自身の反省点としては、初めての実技試験で緊張したという感想がとて多かった。しかし、英語でなくとも、町中で突然見知らぬ人から道を尋ねられたら、誰しも緊張するものだ。これは英会話能力の問題ではない。むしろ緊張する経験を、教室内で擬似的に持つことに意義がある。

4.3.3 地下鉄の乗り換え案内

次に取り組んだのは地下鉄の乗り換え案内である。これは名古屋市地下鉄の路線図を利用し、尋ねる側は行きたい駅を尋ね、教える側はどこでどう乗り継げばよいか説明するという設定で行った。

【資料3】

地下鉄の案内をしよう	
< Part 1 >	
A:	Does this train go to _____?
B:	No, it doesn't. There is no through train to ?
A:	I see. If I take this train, where do I have to change?
B:	You have to change (to _____ line) at _____ (station).
A:	How far is it?
B:	It's _____ stops from here.
< Part 2 >	
A:	I'm going to _____. Do I have to transfer anywhere?
B:	No, you don't have to. This train will take you straight to your destination.
A:	Oh, I see. Thank you.
< Part 3 >	
A:	I'm going to _____. Do I have to transfer anywhere?
B:	Yes, you have to. You have to change [transfer] (from line) to _____ line at _____ (station).
A:	Oh, I see. Thank you.

これも尋ねる側と教える側の両方の役割を最低5回ずつ担当するよう指示し、2週間ほど練習時間をとった。道案内の実技で多くのクラスメートと会話をする体験を持ったせいか、3クラスとも、学生の動きが徐々に活発になっていった。近隣の席にいる学生どうして作業をしたあとは、席を立ってパートナーを探し、学生が教室中を動き回ることが増えた。

その後、地下鉄路線図のみ持たせて、道案内の実技試

験と同じ要領で試験を行った。学生への要求が高い取り組みであることは否定しないが、相対的に見ると、一度実技試験を体験していること、毎時間クラスメートとコミュニケーションをとっていることから、徐々に余裕が出てきたように見受けられる。

- 「この前よりはジェスチャーを意識したつもりがだいぶ緊張してしまった。口がふるえてしまったけど、頑張って立ち直った。でも、うん...もう少しおちつきがあった。」
- 「前回より声を大きくできたと思う。落ち着いてしゃべることができた。」
- 「だらだら長く言っても、向こうがそれを全部覚えられるか分からないので、なるべく簡潔に説明した。」
- 「相手が自分に何を求めているか、理解しようとする努力をした。相手の意図を読みとるのを頑張ったと思います。」
- 「駅員さんに聞いて！や案内するよ！という説明のフレーズにこだわらずにやっている人がいて参考にしたと思った。」

こういった感想を見ると、より適切なコミュニケーションの方策を学生たちが探り始めたと評価してよいだろう。

面白いことに、この課題に取り組んでもまもなく、本当に外国人に地下鉄の乗り方を英語で聞かれたという学生がいた。

- 「地下鉄で名古屋までの行き方を外国人に聞かれたときに英語の授業を思い出して答えたら、理解してもらえたから嬉しかったし、やりがいを感じることができました。」

奇しくも実体験してしまったというのは興味深い。実際にありうるやりとりだということを、その学生は実感したことだろう。

4.3.4 自己紹介

4.3.1 節で自己紹介課題を課したことは述べた。しかし、それはあくまでこれから1年間ともに学ぶクラスメートと人間関係を構築するためのアイス・ブレイキングにすぎないということも述べた。

春学期（前期）の最後に自己紹介という個人プレイを課したのは理由がある。新年度の冒頭に自己紹介をすることはよくあるものだ。しかし、長々と話すことはまずない。名前だけ言って終わることの方が多だろう。単に名前だけを言われても、聞いている側は全ての人物

の名前を覚えることはおそらく無理である。また、4.3.1節に示した資料1を利用したとしても、英語での自己紹介は、知らない人たちの前でたった一人で行う活動なだけに、年度始めには心理的ハードルが高いことも想像に難くない。話す側は自分の言いたいことが上手く言えない可能性があるし、聞く側にとっても初対面の大勢の人の情報を吸収することは困難でもある。毎週与えられる課題を通してクラスメートと人間関係を構築した学期末の時期であれば、顔見知りの仲間の前での発表となるし、自己紹介を聞く側も知った仲間の発表を聞くことになる。よって、英語での自己紹介という課題本来の趣旨を学生自身が理解して取り組むことができるのではないかと考えたのである。自己紹介は年度始めにすべきもの、という固定観念を捨て去ることにより、自己紹介で語る内容の充実を図ったというわけだ。

今回用意した教材は資料4である^{xi}。単に名前をいうだけではなく、或る程度具体的な内容をもったスピーチになるよう配慮し、学生にはできるだけ聞き手を見て話すよう指示した。ただし原稿を見ながら発表してもよいこととした。

【資料4】

自己紹介をしてみよう
<p>【最初の挨拶】 Hello, everyone. I'm _____.</p>
<p>【自分は何者か】 I'm an (undergraduate) student [a freshman] at _____ University. (Today) I would like to talk about myself.)</p>
<p>【出身地】 I come from [My hometown is] _____. I have lived in _____ for _____ months [years].</p>
<p>【自分の専攻】 My major is _____. (I am studying _____.)</p>
<p>【将来の夢】 e.g. My dream is to [I would like to] live an international life. I would like to be a teacher. I would like to work in/for _____. etc.</p>
<p>【趣味】 I like [love] _____. My hobby is _____. My favorite _____ is _____.</p>
<p>【勧誘】 If you have the same hobby, let's talk together. Talk to me anytime.</p>

【最後の挨拶】

Thank you.

話す内容は学生ごとに異なるはずであるから、この資料はあくまでも最低限提供するとよいと思われる基本情報だけを載せてある。発表するにあたって、事前に自分が話したいことを日本語で書かせ、それを可能な範囲で英語に直させた。ただし、日本語を英語に直訳することがここでの目的ではない。習得語彙数、文法事項の理解度に個人差があること、高等学校で習うやさしい英作文は意識というより直訳に近いものが多いことなどを考慮すると、日本語を機械的に英語に置き換えるのは決して容易ではない。したがって、話したい内容を上手く英語に直せない場合は、自分が知っている英語の表現で言える範囲での、簡単な英文でかまわないこととした。また、人前で英語でスピーチすることが主たる目的であるため、文法や語法の間違いなどには拘らず、学生に自由に語らせることとした。創意工夫を凝らして自己紹介する学生もいれば、資料4に沿った自己紹介に留まる学生もいたが、それも学生各自の英語の知識や学習意欲などに依存しうる。30秒以上は話をするを最低条件とした。

本番に臨む学生の意気込みを見てみると、事前の準備に時間や労力をかけている様子が見えてくる。

- 「和英辞典を調べるだけでは文法的に間違っていることが多いので、高校で習った文法を思い出しながら作りました。最初に作った文章は少し長かったので、文章を直しました。読む練習を何度もしました。」
 - 「自分の言いたい内容をはっきり伝えようと思いました。紙を見てはいるけど、ずっと下を向いているんじゃないかと、席の方を見れる時は見ようと心がけました。」
 - 「何から話しをするかなど、流れを意識した。」
 - 「聞いている人が理解できるような、長すぎない文を考えました。」
 - 「みんなに聞いてもらえるといいなと思っている心意気を大事にした。」
- また、クラスメートの自己紹介を見て感じたことも、コミュニケーション能力に対する学生の意識を映し出しているようで興味深い。
- 「発表中、ずっと原稿を見て話しているのと時々でも前を見て話すのでは印象が違うな、と思った。笑顔で話してるともっと聞きたいな、という気持ちになった。」
 - 「文が短いと、分かりやすくいいなと思った。覚えやすいし、その分前を見て話せると思った。」

- 「顔を上げて話す人の声はとても聞きやすく、声がよく通ると思いました。」
 - 「間をとって話すとおちついて聞けるので良かったです。」
 - 「高校のときは英語を勉強する時は発音を気にする癖があったけど、他の人はあまり気にしていない人もいるよだから、『上手く』よりも自信を持ちたいと思った。」
 - 「今までの3回の発表でいつも感じながらも、なかなか克服できないことなのですが、人に分かりやすく話すことって難しいなと改めて、また(笑) と思いました。」
- クラスメートとの仲間意識が希薄な学期当初の時期にこのような自己紹介をさせたとしたら、ここまで用意周到に発表したり、クラスメートの発表をじっくり観察したりする余裕はなかったのではないだろうか。自己紹介に先立ち、毎時間の実技活動と2回のペアワークによる実技試験を経て、コミュニケーションをとることに、学生は徐々に意識的になってきた。クラスメートと共同作業を行うことで人間関係も形成でき、それが授業中の活動を活発にするきっかけにもなったのではないだろうか。

4.4 まとめ

4節では、筆者が実際に行った取組みを詳細に示した。4.3節でも述べたように、毎時間の活動を経て、学生の行動力（行動範囲）は広がっていったと感ぜられる。最初は戸惑いを感じ、なかなか動き回れず、ペアワークにすんなり入れなかった学生も、やがて筆者の合図とともに一斉に席を立ち、パートナーを探して教室を動き回るようになった。こういった活動に対する積極性に個人差があることは否めないが、3クラスともに、パートナーを見つけようときよるきよるする学生が増えていったことは確かである。

次節では、このような講義の仕方が初年次教育として、もっと限定的に言えばコミュニケーション能力育成の場として機能しうると言えるのか、学生のアンケート調査に基づいて考察する。

5. 受講前後の意識調査

一連の講義を終えたあと、学生のコミュニケーションに対する意識が講義開始時と終了時でどのように変化したか調べるため、再びアンケート調査を行った（「コミュニケーションを重視した外国語学習についてのアンケー

ト」）。このアンケートでは、大学入学時点と半期間受講後時点とを対照させて同じ質問項目を提示し、回答してもらった。以下、質問項目ごとにクラス別集計結果を提示するが、3クラスをまとめた集計結果は、受講前後での差異を視覚的に容易に見られるよう、円グラフで示す。

5.1 英語学習に対する意識

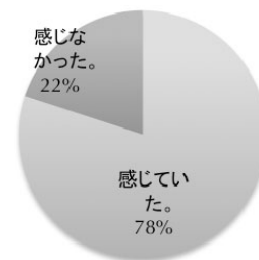
まず、英語を学ぶ必要性を感じていたか、感じるようになったかという意識の変化を見てみよう。クラス別で集計した結果が表7, 8である。3クラスをまとめた結果がそれぞれグラフ1, 2に対応する（以下同様）。

表7 英語を学ぶ必要性を感じていましたか（受講前）

	Class 1	Class 2	Class 3
感じていた	78%	78%	78%
感じなかった	22%	22%	22%
合計	100%	100%	100%

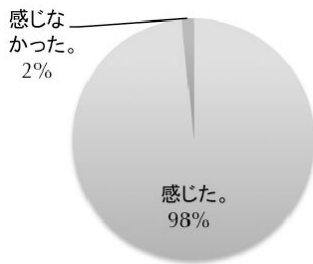
表8 英語を学ぶ必要性を感じましたか（受講後）

	Class 1	Class 2	Class 3
感じた	100%	100%	94%
感じなかった	0%	0%	6%
合計	100%	100%	100%

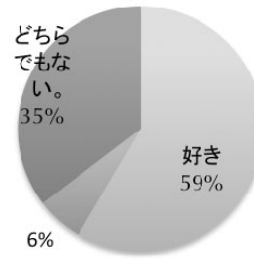


グラフ1 受講前（表7）

これを見ると、ほぼ100%近い学生が英語学習の必要性を感じるようになったことが分かる。その理由としてもっとも多かったのは、職業で英語を使わねばならない機会が増えていることを大学入学後感じるようになったという回答である。現代は外国人と交流する機会が増えている時代であり、英語はコミュニケーションをとる道具として必要だという回答もあった。また、高校までの英語の授業と違い、実際に役立つことを学んでいると感じたという意見も散見される。



グラフ2 受講後 (表8)



グラフ4 受講後 (表10)

5.2 英語が好きになったか

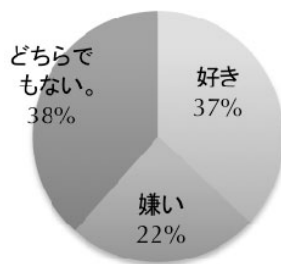
次に、英語学習の必要性とともに、英語が好きになったか、改めて質問してみた。表9、10とグラフ3、4を参照されたい。

表9 英語は好きでしたか (受講前)

	Class 1	Class 2	Class 3
好き	37%	38%	35%
嫌い	30%	29%	12%
どちらでもない	33%	33%	53%
合計	100%	100%	100%

表10 英語が好きになりましたか (受講後)

	Class 1	Class 2	Class 3
好き	63%	48%	65%
嫌い	4%	5%	12%
どちらでもない	33%	48%	24%
合計	100%	100%	100%



グラフ3 受講前 (表9)

5.3 英語学習に対する意識

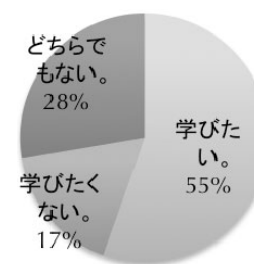
上記2つの質問と類似してはいるが、英語を学びたいという気持ちに変化があったのかも問うてみた。

表11 英語学習に対してどのような気持ちをもっていましたか (受講前)

	Class 1	Class 2	Class 3
学びたい	52%	57%	59%
学びたくない	19%	14%	18%
どちらでもない	30%	29%	24%
合計	100%	100%	100%

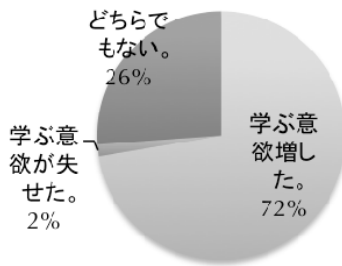
表12 英語学習に対して現在どのような気持ちをもっていますか (受講後)

	Class 1	Class 2	Class 3
学びたい	70%	76%	71%
学びたくない	0%	0%	6%
どちらでもない	30%	24%	24%
合計	100%	100%	100%



グラフ5 受講前 (表11)

この意識の変化の理由として、授業中にクラスメートとコミュニケーションをとる活動が楽しかったと回答している学生が多い。高校時代まで文法を教わる授業に抵抗を持っていた学生が少なくないようだが、今期は全く異なる授業形態であったことが学生の英語嫌いを減らせた一因かもしれない。



グラフ6 受講後 (表12)

この質問に対する理由も上記2つの質問に対するそれと似ており、英語によるコミュニケーションの必要性を感じたこと、英語を話すことに喜びを感じたこと、資格取得や将来の仕事で活かしたいといったものが多い。逆にそこまで英語学習に意欲的になれない理由を述べた学生もあるが、学ぶこと自体が嫌であると回答したのは全体で2% (1名のみ) であった。

5.4 コミュニケーション全般について

本講義では英語を用いてクラスメートとコミュニケーションをとらせる活動を中心に行った。そこで、他人とのコミュニケーションについて受講生がどのような意識を持っているかを調査した。選択肢は以下の5つである。

- a. 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き。
- b. 携帯電話・メール・SNSなどでのコミュニケーションの方が好き。
- c. 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない。
- d. どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き (得意)。
- e. どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い (苦手)。

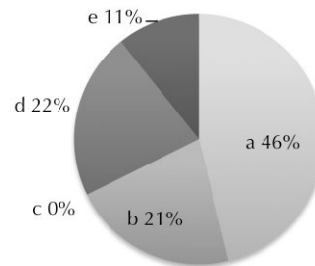
受講前後の学生の意識は以下のとおりである。

表13 コミュニケーション全般について (受講前)

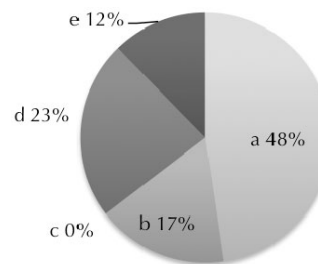
	Class 1	Class 2	Class 3
a	48%	43%	47%
b	11%	33%	24%
c	0%	0%	0%
d	30%	14%	18%
e	11%	10%	12%
合計	100%	100%	100%

表14 コミュニケーション全般について (受講後)

	Class 1	Class 2	Class 3
a	48%	48%	47%
b	11%	24%	18%
c	0%	0%	0%
d	26%	19%	24%
e	15%	10%	12%
合計	100%	100%	100%



グラフ7 受講後 (表13)



グラフ8 受講後 (表14)

この結果を見ると、コミュニケーションの基本は相手と顔を合わせるということだという認識を約半数の学生が持っていることが分かる。近年では携帯電話など、昔はなかった通信手段が生まれ、進化している。このような時代の趨勢と通信媒体による学生のコミュニケーションの取り方の好みとの間に何か傾向が見られるか調べてみたが、選択肢 a と b とを比較すると、数値的には半数以下だが、顔を合わせないコミュニケーションを好む層もいることが分かる。この選択肢は携帯電話の開発される以前では尋ねようのなかった項目であり、文明の進歩はその時代時代の人々に或る程度の影を落としていることがうかがい知れる。この結果を好意的に解釈してみよう。入学時点で学生がどのような形態でのコミュニケーションを得意としているか把握することで、大学卒業までの4年間のあいだにどのようなキャリア教育を施せば a の選択肢を選ぶ学生が増加するか検討する機会を大学は持つ

ことができるのではなからうか。

一方、dの選択肢を選んだ学生も受講前後ともに20%強いることから、“純粋に”コミュニケーションをとることが嫌い(苦手)な学生は10%程度しかいないことが分かる。この層についてもどのようなケアをすべきか、大学でのコミュニケーション教育、キャリア教育のあり方を検討する資料になるだろう。

5.5 顔を合わせるコミュニケーションについて

上の調査と趣旨は重複するが、顔を合わせるコミュニケーションについてのみ取り上げ、学生の抵抗の有無を調べてみた。受講前の選択肢は以下の2つである。

- a. 好き・得意(抵抗はない.)
- b. 嫌い・苦手(抵抗がある.)

表15 顔を合わせるコミュニケーションについて(受講前)

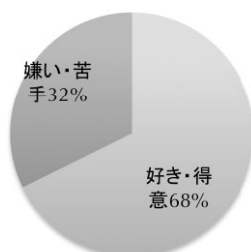
	Class 1	Class 2	Class 3
a	67%	67%	71%
b	33%	33%	29%
合計	100%	100%	100%

一方、受講後の選択肢は以下の4つを用意した。

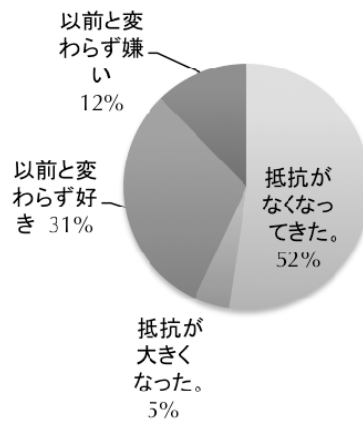
- a. 抵抗がなくなってきた(なくなった)と思う。
- b. 抵抗が大きくなった。
- c. 以前と変わらず好き(得意)。
- d. 以前と変わらず嫌い(苦手)。

表16 顔を合わせるコミュニケーションについて(受講後)

	Class 1	Class 2	Class 3
a	56%	48%	53%
b	0%	10%	6%
c	33%	29%	29%
d	11%	14%	12%
合計	100%	100%	100%



グラフ9 受講後(表15)



グラフ10 受講後(表16)

この調査は半期間筆者の講義を受講して学生の意識に変化があったかどうか調べるために行ったため、受講前後の選択肢が統一されてはいない。しかし、元々好きであったという層と受講後抵抗がなくなってきたと回答した層をあわせると83%にも及び、受講前の68%と比べて、一定の効果があったと判断してよいだろう。

5.6 まとめ

本節では、コミュニケーション重視の英語教育を半期間実施したことで、学生の英語学習意識やコミュニケーションに対する意識がどう変化したか調査した。全ての受講生の意識を筆者の意図どおりに向上させることはできないにしても、属性の微妙に異なる複数のクラスの集計結果を見ると、肯定的に評価してよい効果が見られたのではないだろうか。

5.5節までの質問のほか、ペアワークや実技などによるクラスメートとの交流についても感想を書いてもらった。圧倒的に多いのは、授業中にクラスメートとコミュニケーションをとることで友人が増えたという意見である。特に象徴的な感想をいくつか引用しておこう。

- 「楽しいと思う。こういった機会があるおかげで、話せる友達も増えるし、大学生活がより楽しくなると思う。」
- 「ほぼ全員と交流できる授業はあまりないので、コミュニケーションを取れて良かったと思う。」
- 「とても楽しかったです!!他のクラスより絶対仲のよいクラスだと思います。(誰とも話せる?)」

これらの意見は英語学習そのものが楽しいという感想ではなく、人と交流することの楽しさや喜びを表現したものであろう。言語(運用能力)を身に付けるというこ

とは、コミュニケーション能力を育成するということが不可分ではないのである。

6. おわりに

本稿では、筆者が名古屋産業大学環境情報ビジネス学部と日本福祉大学社会福祉学部で半期間行ってきた必修英語科目の授業運営と受講生の学習意識にどのような変化が生じたか議論してきた。本稿の主張は、1年生対象の必修英語科目は新入生の初年次教育の場としても利用するという点である。(4)のような達成目標を掲げて学生の相互交流を促した結果、人間関係の構築に一定の効果があることが分かった。

名古屋産業大学の場合、クラスの中に留学生もいるが、日本人学生と留学生をどのように交流させるかもこの大学の一つの課題である。英語科目の場を利用することで、国籍を越えた友人関係が築けたという感想もあり、言葉や文化の壁を越える一助となったのではないだろうか。

同じことは日本人学生しかいなかった日本福祉大学のクラスにも言える。人間関係が築けることで大学生活が楽しくなるというコメントを紹介したが、これは新入生の大学での居場所作りにつながっていると考えてよいだろう。学内にはサークルなど、居場所を作れる場はあるにはあるが、大学生全員がサークルに所属するわけではない。しかし必修科目は全員どこかの集団に属さなければならない環境である。毎週同じ仲間と顔を合わせる場を居場所作りを利用できないだろうかということが、筆者が今期の試みを行った動機の一つであった。

本稿ではコミュニケーション能力を「人と接する勇氣を持ち、積極的に人と意思疎通を図り、自分の意見も言え、他人の意見にも耳を傾けられる能力」と定義した。学生の活発な交流を見ていると、少なくともこの3クラスにおいては今回の取組みがコミュニケーション能力を育成するという点でも一定の効果があったと思われる。講義の受講前後に実施したアンケート調査から、各クラスに属する学生たちの属性を見ることができ、その資料を元に彼らが大学を卒業するまでのキャリア教育、就職指導に有効な手立てを探るきっかけとすることができるのではないだろうか。

冒頭でも指摘したように、英語科目は所詮英語の授業であると考えてだけでなく、大学での居場所作り、友人作りの場としても機能させることは可能であり、新入生の4年後を見据えた初年次教育にヒントを与えうる場でも

ありうると結論したい。

【アンケート資料】

(紙幅の関係で質問事項のみ列挙するに留める。)

《資料1》英語受講前アンケート

- 1 英語は好きですか、嫌いですか。どれか一つに を入れて下さい。
 - 一番好きな科目
 - 大好き
 - 結構(かなり)好き
 - わりと(まあまあ)好き
 - 好き
 - 好きでも嫌いでもない
 - わりと(どちらかという)嫌い
 - 嫌い
 - 結構(かなり)嫌い
 - 大嫌い
 - 一番嫌いな科目
- 2 英語は得意ですか、苦手ですか。どれか一つに を入れて下さい。
 - 一番得意な科目
 - とても得意
 - 結構(かなり)得意
 - わりと得意
 - 得意
 - 得意でも苦手でもない
 - わりと(どちらかという)苦手
 - 苦手
 - 結構(かなり)苦手
 - とても苦手
 - 一番苦手な科目
- 3 問1・問2で - まだを選んだ人は回答して下さい。いつ英語が嫌いになりましたか。また、そのきっかけはなんでしたか。差し支えない範囲で理由を聞かせて下さい。(自由記述)
- 4 英語の文法事項で自分が理解できていると思うもの、理解できていないと思うものに を入れて下さい。

5 文型, 肯定文・否定文, Yes/No 疑問文, Wh 疑問文, 時制, 進行形, 受動態, 冠詞, 代名詞, 助動詞, 比較, 命令文, 感嘆文, (to)不定詞, 動名詞/分詞, 分詞構文, 使役構文, 関係詞, 完了形, 仮定法

6 あなたは英語 (の授業) に対してどのような意識を持って臨むつもりですか。(複数回答可)

単位さえ取ればよい.

英語の本が読めるようになりたい.

英会話ができるようになりたい.

映画を字幕なしで見たい.

英語の資格がほしい.

7 5で - に を入れた人のみ回答して下さい. どの程度の英語力を身に付けたいですか.

海外旅行を楽しむ程度

易しい読み物や小説を読める程度

難解な専門書を読める程度

英語を使う職業につける程度

8 英語の資格を持っていますか. 持っていれば, 何の検定の何級を取得しているか書いて下さい. 持っていない人は「ない」の下の空所に を入れて下さい. (自由記述)

9 どんなことを身に付けたいですか. (「全部」「色々」などの回答は禁止!) また, どんな授業を望んでいますか. (自由記述)

10 将来は日本で就職したいですか. それとも海外 (母国) で就職したいですか.

11 読書はしますか.

《資料2》コミュニケーションを重視した外国語学習についてのアンケート

以下の質問の選択肢に をして下さい. (選択肢は一つだけ選んで下さい.)

【大学入学時点での英語学習意識について】

1 英語を学ぶ必要性を感じていましたか.

a 感じていた.

b 感じなかった.

2 英語は好きでしたか.

a 好き

b 嫌い

c どちらでもない.

3 英語学習に対してどのような気持ちをもっていましたか.

a 学びたい.

b 学びたくない.

c どちらでもない.

【大学入学時点での他人とのコミュニケーション意識について】

4 コミュニケーション全般について

a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き.

b 携帯電話・メール・SNS などでコミュニケーションの方が好き.

c 携帯電話・メール・SNS などでしかコミュニケーションがとれない.

d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き (得意).

e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い (苦手).

5 顔を合わせるコミュニケーションについて

a 好き・得意 (抵抗はない.)

b 嫌い・苦手 (抵抗がある.)

【半期間受講した現在の英語学習意識について】

6 英語を学ぶ必要性を感じましたか. (理由は自由記述)

a 感じた.

b 感じなかった.

7 英語が好きになりましたか. (理由は自由記述)

a 好き

b 嫌い

c どちらでもない.

8 英語学習に対して現在どのような気持ちをもっていますか。(理由は自由記述)

- a 学ぶ意欲が増した。
- b 学ぶ意欲が失せた。
- c どちらでもない。

【半期間受講した現在のコミュニケーション意識について】

9 コミュニケーション全般について (理由は自由記述)

- a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き。
- b 携帯電話・メール・SNSなどでのコミュニケーションの方が好き。
- c 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない。
- d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き(得意)。
- e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い(苦手)。

10 顔を合わせるコミュニケーションについて (理由は自由記述)

- a 抵抗がなくなってきた(なくなった)と思う。
- b 抵抗が大きくなった。
- c 以前と変わらず好き(得意)。
- d 以前と変わらず嫌い(苦手)。

11 ペアワークや実技などによるクラスメートとの交流について感想を述べて下さい。(自由記述)

【自由記述欄】その他意見・感想があれば自由に述べて下さい。

注

- i 『文部科学省学習指導要領解説』のうち、『高等学校 外国語編英語編』, 同『国語編』(以上, 平成 21 年 12 月), 『中学校 外国語編』, 同『国語編』(以上, 平成 22 年 7 月) 参照。
- ii 本稿執筆時点では SSSV は実施されていたが, 2012 年度をもって廃止され, 2013 年度からは新たな事業(留学生交流支援制度, 留学生交流支援制度など)が施行されることになった。
- iii 「初年次教育」「初年時教育」という二つの表記が見られるが, 用語としての使用頻度としては前者の方が圧倒的に高い。しかし, 「初年次教育学会」をインターネットで検索しようとする, 「初年時教育学会」でも検索可能である。

学会および研究者が「次」と「時」を使い分ける基準が明確でないが, 本稿では両者を特に区別せず, 「初年次教育」という用語を使用することとする。

本稿で引用した論文のほかに, たとえば牧(2012)は, 大学の初年次教育について, 学びの支援, 体験型学習, PBL などといった学生支援や講義方針などをキーワードに, 大学での学び方を学生にいかに教え, 教育し, 進級させるかといった観点から議論している。

因みに CiNii で「初年次教育」と「必修英語」をキーワードに検索したところ, 該当する論文は 0 件であった。

- iv 日本福祉大学では, 「フレッシュマン・イングリッシュ 2-1」(前期開講, 以下 FE-2) という必修科目も開講されている。これは主にリスニングなどのオーラル教育を主眼としている。また, 両大学とも, 秋学期(後期)には EC-II, FE-1-2/2-2 という必修科目が開講され, 通年で受講するが, 担当教員とクラス編制は 1 年間通じて変わらない。
- v 1 クラスは中国人留学生が 7 名, もう 1 クラスは中国人留学生が 7 名, ネパール人学生が 1 名。
- vi アンケートの正確な質問・選択肢は論文末尾の資料を参照のこと。
- vii 留学生には彼らの母国語での読書の習慣を問うた。
- viii 筆者は平成 24 年度秋学期(後期)も両大学において Class 1, Class 2, Class 3 を引き続き担当している。講義方針も春学期(前期)と同様である。
- ix このようなテーマを講義で最初に試みたのは, 平成 17 年度に日本聴能言語福祉学院義肢装具学科 2 年生の必修英語のクラスであった。その後改良を重ねて現在に至っている。のちに学生の感想を引用するが, 学生の高校までの英語学習に対する印象として多く見受けられるのは, 役に立つのかどうか実感の湧かない文法や長文読解の授業に或る種の空しさを感じていたという意見である。それに対し, 日本聴能言語福祉学院義肢装具学科で行った講義や本稿の調査対象であるクラスでは, 学習内容が「実用的である」と受講生が感じていると分かる感想・回答が少なからず見られた。実学的な英語の授業だけがよいとは言わないが, 学生の関心を高めるためには, 学生が英語学習が楽しいと感じるしかけを用意する努力は必要なのかもしれない。
- x 以下に示す各資料を作成するにあたり, 主に小島(1970)を参考にした。
- xi 資料のプルーフに協力して下さった Jeff Singal 氏に感謝申し上げる。

参考文献

- 青木睦子(2006)「英語教育: コミュニケーション能力に向けたの教授法」『北海道武蔵女子短期大学紀要』38, 105-124.
- 青木睦子(2007)「英語教育: コミュニケーション能力を育てる授業」『北海道武蔵女子短期大学紀要』39, 34-57.
- 岡崎万紀子(1997)「コミュニケーション能力育成のための大学英语教育カリキュラム作成」『国際経営論集』12, 143-158, 神奈川大学.
- 川島聡史ほか(2007)「実践的コミュニケーション能力の育成」宇都宮大学 第 52 回公開研究発表会 外国語科(英語)発表要項.

- 木村秀喜 (2007) 「短期大学新入生を実際の研究に参加させる
試み 本学栄養健康学科における新しい初年時教育実践報
告」 『下関短期大学紀要』 25, 95-103.
- 仲潔 (2011) 「言語観を豊かにするコミュニケーション活動」
『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 60, 103-124.
- 牧恵子 (2012) 「愛知東邦大学「東邦基礎」における初年次教
育の課題」 『東邦学誌』 41 (1), 169-192.
- 宮原哲 (2006) 『新版 入門コミュニケーション論』 松柏社.
- 柳父立一ほか (2008) 「IT を活用したアイス・ブレーキング：
新入生を対象とした班新聞作り，3年間の成果（FD と
教師力の向上，新しい教育の波）」 『年会論文集』 24, 194-
195, 畿央大学.

参考資料

- 小島義郎 (1970) 『みんなの英会話』 南雲堂.
- 文部科学省 『学習指導要領解説 高等学校 外国語編英語編』
(平成 21 年 12 月)
- 文部科学省 『学習指導要領解説 高等学校 国語編』 (平成 21
年 12 月)
- 文部科学省 『学習指導要領解説 中学校 外国語編』 (平成 22
年 7 月)
- 文部科学省 『学習指導要領解説 中学校 国語編』 (平成 22 年
7 月)